

■ 論 文

## インターネット上での居場所となる人間関係の構築過程

藤井 美里\*、竇 雪\*\*

### 【要旨】

近年、児童や青年に対する居場所の必要性が言及される中、インターネットを活用した居場所づくりが注目されている。しかし、物理的な空間を持たず、対面でのコミュニケーションができないインターネット上において、居場所が構築されるプロセスや要因については、まだわからない点も多い。そこで本研究は、青年期におけるインターネット上での居場所となる人間関係がどのように構築されていくのかについて、大学生を対象に検討した。具体的には、これまでにインターネット上で新しく人間関係を構築した経験があり、かつ複数回の交流を介してその人間関係に居場所を感じていたという条件に当てはまる大学生5人を対象として、インタビュー調査を行った。結果、既存の集団への受動的参加、通話での交流、関係性を通じた心理的な恩恵の獲得の3つの段階を通して、インターネット上での居場所となる人間関係が構築されていくことが示された。一方で、全ての参加者においてこれらの段階が見られたわけではなく、別の構築過程の可能性を検討していく必要性が示された。

キーワード：居場所、インターネット、構築過程

### 1. はじめに

近年、児童期や青年期の人々における居場所の必要性について、その重要性が改めて指摘されている。文部科学省（2015）によると、「居場所づくり」とは児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を作り出すことを指す。従来、児童期や青年期の居場所は家庭や学校、または地域社会で構築されてきた。しかし、近年はソーシャル・ネットワークワーキング・サービス（SNS）の発展により、インターネット上の空間が新たに居場所づくりの場となり始めている。実際、2021年におけるインターネット利用状況をみると、13歳から19歳が98.7%、20歳から29歳が98.4%と、かなり高い数値となっており、SNSの利用状況をみても、13歳から19歳が90.7%、20歳から29歳が93.2%と、こちらも90%を超えている（総務省、2022）。さらにインターネット空間を、ほっとできる場所、居心地のよい場所と感じている子供・若者の割合は56.6%であり（内閣府、2020）、青年期の人々にとってインターネット上の空間が居場所として機能する可能性がうかがえる。

若者にとって非常に身近なツールであるためインターネットは、新たな居場所づくりの場として期待されている一方で課題も存在する。例えば、家庭や学校、地域社会での居場所づくりには、通常ハブとなる物理的な空間があり、そこを拠点として居場所を感じられる人間関係が構築されてきた。しかしインターネット上にはそうした物理的な空間が存在

\* 立命館大学大学院人間科学研究科 博士課程前期課程

\*\* 立命館大学総合心理学部 准教授

しないため、非言語を使ったコミュニケーションが十分に取れない、または相手の正体を探りきれない、といった問題が生じてしまう。このような制約があるなかで、他人と関係を深め、安心する居場所を構築するには、何が必要で、どんな過程をたどるのだろうか。もしこれらの点を明らかにできれば、インターネットを基盤とした居場所づくりをより効果的に支援することが可能となる。

そこで、本研究では大学生を対象に、インターネット上において居場所となる人間関係が形成されていく過程について検討する。大学生は発達段階としては青年期にあたり、また進学によって精神的・物理的な自立がより求められる時期でもあることから、それまで構築した居場所とは別に、新たな居場所づくりを構築しやすい層だといえる。加えて、大学での学習においてはパソコンなどの電子機器を使用することが多く、必然的にインターネットにアクセスする機会も増える。そのため、インターネット上での居場所づくりを研究する上で、大学生は適切な対象者といえる。本研究では、これまでインターネット上で居場所となる人間関係を構築したことがある大学生にインタビューを行うことで、人間関係がどのように深まっていったのか、関係を促進させる要因が何であったかを明らかにする。

## II. 先行研究

### II. 1 居場所の定義とその効用

居場所という概念には、はっきりとした定義が存在していない。しかしそんな中でも、これまでの研究で様々な定義づけがされている。宮下・石川（2005）によると、居場所とは自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることができ、ありのままの自分を受け入れてくれ、かけがえのない自分の価値を大事にしてくれる場所と定義されている。また中島他（2007）は、一般用語と研究用語の2つの側面から定義を行っており、居場所を他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような「自分を確認できる場所」と定義した。さらに原田・滝脇（2014）は、それまでの先行研究を整理したうえで、「居場所とは、自己に自己支持的な自己像や自己概念を形成させたり、否定的な自己意識から逃避、避難させたりすることにより、自己にまとまりを与えたりまとまりを回復したりする体験ができる場である。また、自己にそのような体験ができる見通しをもたせた上で、自己の期待通りに安定的に自己支持的な働きかけが得られる場所である（原田・滝脇、2014、p. 129）」と定義している。これらの研究から居場所の定義において、自分自身を安定させる場であること、ありのままの自分を受け入れてくれるような他者がいる場であることが、重要であると考えられる。

また居場所には、大きく分けて個人的居場所、社会的居場所の2種類があるとされている。個人的居場所とは、一人になることで、情緒を安定させたり、自己受容したりすることにより、自己の存在を確認し、自分らしさを取り戻せることで自己にまとまりを与える体験ができる場とされている（原田・滝脇、2014）。それに対して社会的居場所とは、他者から得られる自己対象に触れることにより、自己の存在や自分らしさを確認できることで自己にまとまりを与える体験ができる場とされている（原田・滝脇、2014）。この分類は前述した居場所の定義にも共通する部分があり、つまり居場所において自分自身だけであるか、自分以外の他者がいるのかという視点は必要であるといえるだろう。

居場所を持つことで、様々な効用が見られることも明らかになっている。その1つが、心理的適応、学校適応に対する効用である。中学生、大学生において、両者ともに居場所感が高いほど心理的適応が高くなることが示された。さらに中学生については、居場所感が学校適応に影響していることも明らかになっている。しかしその一方で、大学生における学校適応には影響が見られない（石本、2010b）。このことから、大学生は学校外での人間関係が増加するといったように、中学生から大学生にかけて人間関係が変化することで、それぞれの居場所感に質の違いが見られたと考えられる。

そして自分ひとり、家族、友だちといった人間関係における居場所感と、良好な精神的健康の関連についても、検討されている。例として、中学生においては「家族のいる居場所」が、大学生においては「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が良好な精神的健康にとって、重要であることが示されている（杉本・庄司、2006）。このように、中学生は「家族のいる場所」といった他者が存在する社会的居場所が重要であり、それに対して大学生は「自分ひとりの居場所」といった個人的居場所も必要であると考えられる。さらにこの結果は、前述した中学生から大学生における人間関係の変化を、人間関係の分類から明らかにしているといえるだろう。

また個人的居場所、社会的居場所という観点から、居場所の効用について言及がなされている。まず社会的居場所の確保は精神的健康と中程度の関連があるが、個人的居場所の確保は精神的健康とほとんど関連がないことが示された。この結果から、居場所づくりが精神的健康の向上を目指すものであるならば、関係性を育み社会的な居場所の確保を目指すといった視点が必要であると考えられる。また関係性のなかでありのままにいられること、関係性のなかで役に立っていると感じることはそれぞれ社会的居場所の確保に関連する感覚であり、これらの感覚をもつことが社会的居場所の確保につながるものであることも示された（石本、2010a）。

以上のように居場所は、一人になることで自己を安定させる個人的居場所と、他者の存在によって自己を捉える社会的居場所によって構成される概念と考えられる。そして特に社会的居場所は、心理的適応や学校適応、精神的健康に対して有用であるといえる。

## II. 2 インターネット上での居場所の現状とその効用

これまで居場所は、学校現場を中心とした対面上におけるものが検討されてきたが、現在はインターネットといったオンライン上においても、様々な形で居場所が形成されており、それらについても検討が進んでいる。まずは、インターネット上における居場所の現状やその効用について整理する。

まず1つは、ブログである。ブログでは、対人関係拡張や自己開示・自己客観視が多く見られたことが明らかになっている。その効用については、このようなブログの利用は、「自己と向き合う場所」としての側面と「多数の人々と意見交換をする場所」としての側面を兼ね備えるために、自己の問題点に対する客観視や明確化がなされやすく、それゆえに現実生活の他者との関係の改善につながる。このようにブログは他者と繋がるだけでなく、自分自身を見つめ直すといった個人的居場所のような機能を持っていることが示された（藤・吉田、2009）。これはある程度の長い文章を書き、投稿するといったブログ特有の

投稿様式による効用であると考えられるだろう。

また主流な SNS の 1 つである Twitter についても、先行研究において言及されている。Twitter では、同じ境遇のユーザを一瞬で見つけることができるため、労力を割いてまで一つの関係性を維持し続ける必要がない（高谷、2019）。さらに Twitter はサービス開始当初から繋がり「ゆるさ」を特徴としており、フォロワーとのドライな関係が現代人にマッチしている。しかしその一方で、Twitter にはハッシュタグ機能を利用したアドホックなコミュニティも形成されており、ブログや掲示板などの従来のサービスよりもむしろ効率的で有用なコミュニティが形成されているのではないかともいえる。そしてその効用については、現実世界で孤立無援になりがちな社会的マイノリティにとって、匿名のまま繋がることができ共感や連帯感を得ることができるウェブであると指摘されている（高谷、2019）。このように Twitter では他者と繋がることを特に重要視しており、ブログでの「多数の人々と意見交換をする場所」といった効用がより深まったものになったことで、社会的居場所のような効用を持つようになったと考えられる。しかしそれに対して、ブログのように「自己と向き合う場所」といった個人的居場所のような効用は先行研究では見られなかった。

そして特定のインターネットサービスに限らず、インターネット全体の居場所やその効用についても研究されている。最近の調査では、コロナ禍におけるオンライン授業や在宅勤務の増加により、時にオンライン環境も利用しながら、ファーストプレイス（自宅）がセカンドプレイス（業務や学習）やサードプレイス（気分転換や他者との交流）の役割も担うことになりつつあることが示された（広田他、2022）。さらにオンラインにおける居場所について着目すると、a) SNS や動画視聴など 1 人利用で交流がない場、b) SNS や Zoom など、雑談や課題の相談、趣味を一緒に楽しむなどのリアルな知り合いとの交流の場、c) SNS や動画配信サイト、オンラインゲームなど、オンラインでの知り合いあるいは全く知らない人との交流の場に分類されうる。また SNS を介したインターネット上での人間関係が居場所として機能しているのか、またそれが心理的 well-being と関連しているのかについても、これまでの研究で検討されている。その結果、ネット上でも現実と同程度の心理的居場所感が得られることが明らかになった（藤野、2017）。しかし心理的 well-being との関連が見られなかったことから、その性質は現実のものと同質とは言えず、ネット上の居場所感は個人的居場所に近いのではないかとも考えられる。これらの結果は、インターネットサービスにおける社会的居場所としての効用だけではなく、個人的居場所としての効用も指摘しているといえるだろう。

このように、インターネット上での居場所は SNS の種類によって様々であり、そのため得られる効用も多種多様である。しかしこれらの研究では、インターネット上での居場所がどのようなものであるかについては、十分に言及されていない。そもそもこれまで検討されてきた居場所は、対面上における人間関係を前提としたものが多い。例として、個人的居場所確保度尺度・社会的居場所確保度尺度（石本、2010a）では、「心の居場所となるような自分だけの部屋がある」「友人といることで心の居場所が得られている」などといった対面を想定した項目となっている。また居場所についての検討は学校現場が中心となることが多く、インターネット上の居場所を検討するうえで採用するには適切ではないと考えられる。

そして居場所となっていく過程が、対面上とインターネット上は大きく違うことも挙げ



られる。対面では初対面から表情や声、動作といった非言語コミュニケーションが把握できる状態であり、日々を共に過ごしていく中で仲が深まり、居場所となっていくと考えられる。それに対してインターネット上では、相手の顔や声などが一切わからない環境であることが多く、対面のように仲が深まっていくとは考え難い。仲が深まっていく例が見られても、この過程においてインターネットサービスでのどのような行動や機能などが貢献しているのかについては、これまで十分に検討されていない。

さらにインターネット上の人間関係について検討された研究の中には、既に対面上で人間関係が構築されていることを想定したものも多い。SNS 利用動機と SNS ストレスの関連においては、SNS 利用動機の 1 つとして友人関係維持型が挙げられている（岡本、2017）。また Twitter の利用動機と利用満足の間連においても、Twitter を介したコミュニケーションに関連する動機は、その相手が既存関係の延長（「既存関係維持動機」）か、そうでないか（「交流／自己表現動機」）に区別されることが指摘された（柏原、2011）。このようにインターネット上の人間関係には既存の人間関係が含まれることが多く、インターネット上のみの人間関係に焦点を当てた研究は決して多くない。

つまりこれまでの研究から、インターネット上での居場所となる人間関係を理解することは容易ではないと推察される。そしてそのためには、インターネット上での居場所となる人間関係がどのように構築されるのか、その全体像を捉える必要があると考える。そこで本研究では、インターネット上での居場所となる人間関係の構築過程を明らかにすることを目的とする。

### Ⅲ. 方法

#### Ⅲ. 1 調査概要と調査参加者

本調査では 2022 年 8 月下旬から 10 月上旬にかけて、Zoom を用いたオンライン上での半構造化インタビュー調査を実施した。実験参加者は男子大学生 2 名、女子大学生 3 名の計 5 名であった。参加者については、インターネット上で新しく人間関係を構築した経験があり、かつその人間関係に居場所を強く感じていたことが条件であった。この条件に当てはまる者を、調査者が所属する大学の講義を通して質問紙調査で抜粋し、その中からインタビュー調査に参加できる者を集めた。なおここでの「居場所を強く感じていたこと」とは、質問紙における社会的居場所尺度（原田・滝脇、2014）の得点が 8 割以上であったことを指す。

なお、本実験は、Zoom を用いたオンライン上でのインタビュー調査であったため、調査者・参加者共に各々のスマートフォンあるいはパソコンを利用した。インタビュー時は内容の記録のため、ボイスレコーダーとパソコンを用いた。パソコンでの記録については、Word を用いて行った。ボイスレコーダーで記録された内容は、逐語録作成・分析のため Excel を用いて記録された。なおこれらの記録は、参加者の同意を得たうえで記録された。

#### Ⅲ. 2 調査の手続きと内容

参加者には、事前に指定された日時に URL から Zoom に参加してもらった。その後調査

者から研究の目的、研究方法、研究参加による利益やリスク、研究結果の取り扱い等についてまとめられた Word ファイルの同意書を、メールで受け取った。それを見ながら調査者からの簡単な説明を受け、同意できる場合は同意書下部に記載された「同意する」にチェックをつけた。そしてチェックをつけた同意書をメールに添付し、調査者に送信した。その同意書を調査者が確認した後、インタビューを受けた。

インタビューでは、まず参加者の基本属性（年齢や性別など）を確認した後、参加者がインターネット上で作った、居場所となる新しい人間関係はどのようなものであるかについて尋ねた。その際、該当する人間関係が複数ある場合は、その中でも居場所であると最も強く感じたことのあるものについて話をしてもらった。その後、その人間関係ができた時から、居場所であると感じることができた時までの過程について、詳しく尋ねた。なおこのインタビューは半構造化面接であったため、質問に対する参加者の回答を受けて、調査者からさらに質問を重ねるといった形をとった。

### Ⅲ. 3 分析方法

本研究では、質的分析手法である SCAT を用いた。SCAT では発話内容をデータとして記述し、「< 1 >データ中の注目すべき語句」「< 2 >それを言いかえるためのテキスト外の語句」「< 3 >それを説明するようなテキスト外の概念」「< 4 >そこから浮かび上がるテーマ・構成概念」の順にコードを考えて付していく 4 段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。ここでの理論を記述するとは、ストーリー・ラインからどのような知見が得られるかを考え、その知見を一般性、統一性、予測性などを有する記述形式で表記することを指す（大谷、2019）。

## Ⅳ. 結果

表 1. インタビュー調査参加者の基本属性

氏名	年齢	性別	居場所形成の過程で用いたインターネット上のサービス	居場所が確立された時期
A	20	女性	Twitter、mocri、Discord	高校2年生ごろから大学2年生にかけて
B	23	男性	ネイティブキャンプ	大学2年生から大学3年生にかけて
C	20	女性	Twitter、Twitter スペース	高校生からインタビュー当時まで
D	21	女性	Mirrativ、Discord	大学2年生からインタビュー当時まで
E	23	男性	Discord、Twitter	大学2年生からインタビュー当時まで

まず、本調査の参加者の基本属性を表 1 に示す。参加者は Twitter（現 X）といった一般的な SNS だけでなく、Discord や mocri、Twitter スペースといったインターネット上の通話サービスを多く用いていた。その他には Mirrativ といったインターネット配信サービス、ネイティブキャンプといったオンライン英会話の利用があった。そして以下に、各参加者のストーリー・ラインおよび理論記述を示す。

#### IV. 1 参加者 A

##### (a) ストーリー・ライン

A は友人からの影響を受けて、創作コミュニティへの参加を決めた。そこでは創作物を通じた感性の共有が行われた。オンライン上の交流に対する非積極性があったものの、対照的な友人の存在から、それを介した人間関係の広がりを獲得することができた。しかし見知らぬ集団に感じる対人不安から、積極的な参加には繋がらなかった。

すると大学入学後、コミュニティの変化が見られた。そこでは関係形成のきっかけとなったゲームの存在があり、同じ時期に同じものを楽しむという共通点から、mocri や Discord を用いた通話の習慣化が進んだ。また A にとって通話は新型コロナウイルス流行時の自宅での過ごし方の 1 つであり、時間制限のない状況も相まって、さらなる通話頻度の増加に繋がった。そしてその習慣化で解消された対人不安に代わって、自由参加型の通話の増加による集団所属感の高まりを感じるようになった。さらに自由参加型の通話を用いた交流の中で、A は聞き手として相談行動に接することの多さを経験した。そして相談行動を通して感じる、相手からの対人信頼感を獲得した。

また通話だけではなく、Twitter 上での交流も存在した。そこでは対人的好奇心や感性の共有への意欲に基づいた評価行為が多く見られ、それにより互いの自己肯定感の高まりが見られた。そしてこうした集団内の同行動の存在が、集団凝集性の高まりに繋がった。またパーソナルスペースに踏み込んだ会話も繰り返され、それに対する肯定的反応も多かった。このような新型コロナウイルス流行時におけるインターネット上での交流の増加が、以前あった関係性の活性化に寄与し、社会的居場所の獲得に至った。

その後、特に仲の良いメンバーの中でオンラインからオフラインへの交流の変化が現れた。その変化の最中には、外見情報の相互開示や自己開示の多いメンバーによる既知感の形成があった。

##### (b) 理論記述

友人からの影響を受けて、創作コミュニティへの参加を決めた。見知らぬ集団に対する対人不安から、積極的な参加には至らなかった。コミュニティの変化があり、同じ時期に同じものを楽しむという共通点から、通話の習慣化が進んだ。また時間制限のない状況であったことも習慣化に寄与していた。通話では、聞き手として相談行動に接することが多く、相手からの対人信頼感を獲得した。通話の習慣化により対人不安が解消され、集団所属感の高まりを感じた。Twitter 上では、対人的好奇心や感性の共有への意欲に基づいた評価行為が多く、互いの自己肯定感の高まりに繋がった。パーソナルスペースに踏み込んだ

会話も繰り広げられ、それに対する肯定的反応も多かった。オンライン上での交流の増加が以前あった関係性の活性化に繋がり、社会的居場所の獲得に至った。

#### IV. 2 参加者 B

##### (a) ストーリー・ライン

B は新型コロナウイルス流行による自由に過ごせる時間の増加から、その時間を利用した言語習得を試みた。アプリという手軽な形での英語学習を発見し、通話機能を用いた対面に近い形での授業を受けるようになった。多種多様な講師の授業を受ける中で、相性の良い講師との出会いを経験した。初対面時での相手に対する好印象から、その後も数回授業を受けるようになった。そこでは同年代であるという情報、非言語的要素による印象の向上や丁寧な指導もあり、満足度の高さが常にあった。このように変化のない好印象によって、授業の習慣化に繋がった。講師との会話では、様々な話題選択が見られた。自由度の高い会話を通じた英語学習を踏まえ、異文化交流や自身についての語り、同世代共通の話題が挙がる。さらに友人や家族といったパーソナルスペースに踏み込んだ話題へと変化したり、友人に対する授業への勧誘行動も見られた。

また授業後には講師からの評価もあり、学習内容の振り返りや動機づけの向上といった指導方法が用いられ、質と量の高い定性評価が与えられた。これが B の他者肯定感の獲得に繋がった。このようなクオリティの高い評価が変わらず存在し続けた。

こういった授業内外の様々な要素により、社会的居場所の形成へと至った。しかし新型コロナウイルスに関する規制の緩和により、日常生活の再開が始まり、妥協点の発生が見られた。さらに授業環境への適応による話題選択の難しさも生じ、自然消滅へと至った。

##### (b) 理論記述

自由に過ごせる時間の増加から、言語習得を試みた。アプリという手軽な形での英語学習を発見し、通話機能を用いた対面に近い形での授業を受けた。初対面時での相手に対する好印象から、その後も授業を受けるようになった。学習内容の振り返りや動機づけの向上といった指導法、非言語的要素による好印象から、授業の習慣化に繋がった。講師との会話では、異文化交流や自身についての語り、同世代共通の話題、パーソナルスペースに踏み込んだ話題が上がった。授業後の講師からの評価では、質と量の高い定性評価が与えられた。クオリティの高い評価が変わらず存在していたことから、他者肯定感の獲得に繋がった。授業内外の様々な要素から、社会的居場所の形成へと至った。

#### IV. 3 参加者 C

##### (a) ストーリー・ライン

自身の創作物に対する評価の欲求がある C は、Twitter での発信を行っていた。そこでは不特定多数への発信ながらも、反応・返信を求めないツイートをしており、創作物を発信する手段としてのインターネットという状態にあった。しかしそれに対する返信を受けて



始まる、受動的な繋がりが発生した。創作物についての会話を通じた関係の深まりによって、初めてのインターネット上での友人を獲得した。そしてインターネット上の友人とのエアプライを用いた周囲に見える形での会話により、高校の友人との共通点の発見に至り、Cの持つ人間関係を中心として新たな人間関係の発生が見られた。その後受験により利用動機が変化しながらも、変わらずにいる周囲があり、熱心な閲覧者とのいいね・リツイートを超えた関係の始まりが見られるようになった。さらにその後ジャンルによる複数のアカウントの使い分けを行い、ジャンルによる繋がり方の違いも見られるようになった。するとCの持つ人間関係を中心として形成される、インターネット上でのグループが発生した。このような集団凝集性の高まりが、集団所属感の獲得に繋がった。そこでは偶発的なタイムライン上でのグループの会話が発生し、そこに自分も参加していることから感じる社会的居場所感があった。またグループでの交流はタイムライン上だけではなく、自由度の高い通話機能による声での気軽な交流にも及んだ。

## (b) 理論記述

自身の創作物に対する評価の欲求から、SNSでの発信を行った。不特定多数への発信ながらも、反応・返信を求めないツイートをしていた。返信を受けて始まる、受動的な繋がりが発生した。創作物についての会話を通じた関係の深まりによって、初めてのインターネット上での友人を獲得した。エアプライを用いた周囲に見える形での会話により、Cの持つ人間関係を中心として新たな人間関係の発生が見られた。ジャンルによる複数のアカウントの使い分けから、ジャンルによる繋がり方の違いもあった。Cを中心とした様々な人間関係から、インターネット上でのグループが発生した。集団凝集性の高まりから、集団所属感の獲得に繋がった。偶発的なタイムライン上でのグループの会話が見られ、そこに自分が参加していることから感じる社会的居場所があった。

## IV. 4 参加者 D

### (a) ストーリー・ライン

新型コロナウイルス流行による自粛の中、Dは自由時間の増加により話し手の存在を熱望する状態にあった。そしてインターネット配信の一種であるラジオのような配信から、特定の配信者の発見に至った。配信者の話題選択の良さやコミュニケーションが成立する環境であったことから、Dにとって適度な落ち着いた配信の雰囲気となっており、視聴の習慣化が進んだ。またそこでは配信者と他の視聴者によるグループがあり、勧誘を受けて通話グループへの参入に至った。

深夜に及ぶ交流の習慣化を通して、周囲の共通の趣味であるゲームの開始につながり、周囲からの教示も受けるようになった。そして通話グループへの参加による集団所属感を得た。しかし匿名性や外見情報の秘匿といったインターネット上での交流に対する印象や、周囲に対する非現実感から、十分ではない自己開示となった。その一方でグループ通話の目的の変化や、深夜や早朝までに及ぶ通話の習慣化もより見られるようになった。

すると特定のメンバーでの親睦の深まりが生じ、通話での互いに顔を見せ合う親睦会が

開かれた。これにより、外見情報の提示によるオンライン上での関係性に対する印象の変化が起こった。また外見情報の開示の重要性から、相互の開示によって信頼感の形成がなされた。この一連の出来事は、Dにとってオンライン上での人間関係についての成功体験となり、社会的居場所の獲得へと繋がった。

## (b) 理論記述

自由時間の増加により、話し手の存在を熱望していた。インターネット配信の一種であるラジオのような配信から、特定の配信者の発見に至った。話題選択の良さやコミュニケーションが成立する環境であったことが、落ち着いた配信の雰囲気を作った。視聴の習慣化が配信者と他の視聴者によるグループからの勧誘に繋がり、通話グループの参入に至った。グループでは、深夜や早朝までに及ぶ通話の習慣化が見られた。通話グループへの参加が、集団所属感の獲得に寄与した。匿名性や外見情報の秘匿といったインターネット上での交流に対する印象や周囲に対する非現実感は、自己開示を止まらせた。特定のメンバーでの親睦の深まりが、通話での互いに顔を見せ合う親睦会に繋がった。外見情報を相互に開示したことは、信頼感を形成させた。オンライン上での人間関係についての成功体験が、社会的居場所感の獲得に影響を与えた。

## IV. 5 参加者 E

### (a) ストーリー・ライン

Eは実際の友人からの勧誘を受け、あるグループへの参加に至った。それは共通の趣味についてのグループであり、趣味についての会話や共有が行われた。参加には、既にグループを知っている友人の存在やグループについての情報提供が影響していた。

グループでは、通話を用いた交流が行われた。通話では主に、共通している好きなアイドルコンテンツについての語りが見られた。しかし通話には参加しながらも、緊張感から声ではなく文字での会話が行われた。この際Eは、実名や顔がわからない相手との交流であるという認識から緊張感を感じており、ネットリテラシーをもとに距離感を図りながら、相手との共通点の発見をしていった。また相手の内面を知ることで形成されていく人物像が存在し、それがEの持つ基準に達し、声での参加へと繋がった。このように回数を重ねることで、通話参加に対する文字から声への変化が起こった。通話時間にも変化が見られ、時間制限付きでの通話への参加から、習慣化により深夜までの参加に変化を遂げた。また通話の中では、個人を指名した特別感のある呼びかけや挨拶の存在があり、立ち位置を固めていくために機能していた。そして日常生活と変わらぬ「ツッコミ」の役割を得ることで、初めて居場所の獲得に至った。

このようにオンライン上での交流が進むにつれ、オフラインでの交流も見られるようになった。しかし対面するまでは、オフラインでの気まずさに対する回避行動の困難さや、対面することへの恐怖を感じていた。しかしそれに勝る関わりの中での楽しさを感じていたことから、対面することへの決意に繋がった。こうしたオンライン・オフラインともに小さな出来事の積み重ねがあり、この積み重ねによる親密さが、居場所をより強く感じる

ことに繋がった。

## (b) 理論記述

既にグループを知っている友人の存在や、グループについての情報提供から、共通の趣味を通じたグループへの参加を決める。通話では緊張感から、声ではなく文字での会話を行った。緊張感は、実名や顔がわからない相手との交流であるという認識から発生していた。回数を重ね、相手の人物像や共通点を発見していくことで、声での参加へと繋がった。声での参加により、深夜までの参加に変化した。個人を示した特別感のある呼びかけや挨拶が、立ち位置を固めていくために機能した。日常生活と変わらぬ役割を得ることで、初めて居場所の獲得に至った。オンライン・オフラインでの小さな出来事の積み重ねにより生まれた親密さが、居場所をより強く感じることに繋がった。

以上のストーリー・ラインおよび理論記述を踏まえ、インターネット上での居場所となる人間関係の構築過程を段階ごとに述べる。またその過程を、図1に示す。

第一段階として、既存の集団への受動的な参加がある。この段階では以前から存在していた集団に、他者からの勧誘等を受けて参加を決めるという段階である。参加者Aにおける「友人からの影響を受けて、創作コミュニティへの参加を決めた」、参加者Dにおける「勧誘を受けて通話グループへの参入に至った」、参加者Eにおける「実際の友人からの勧

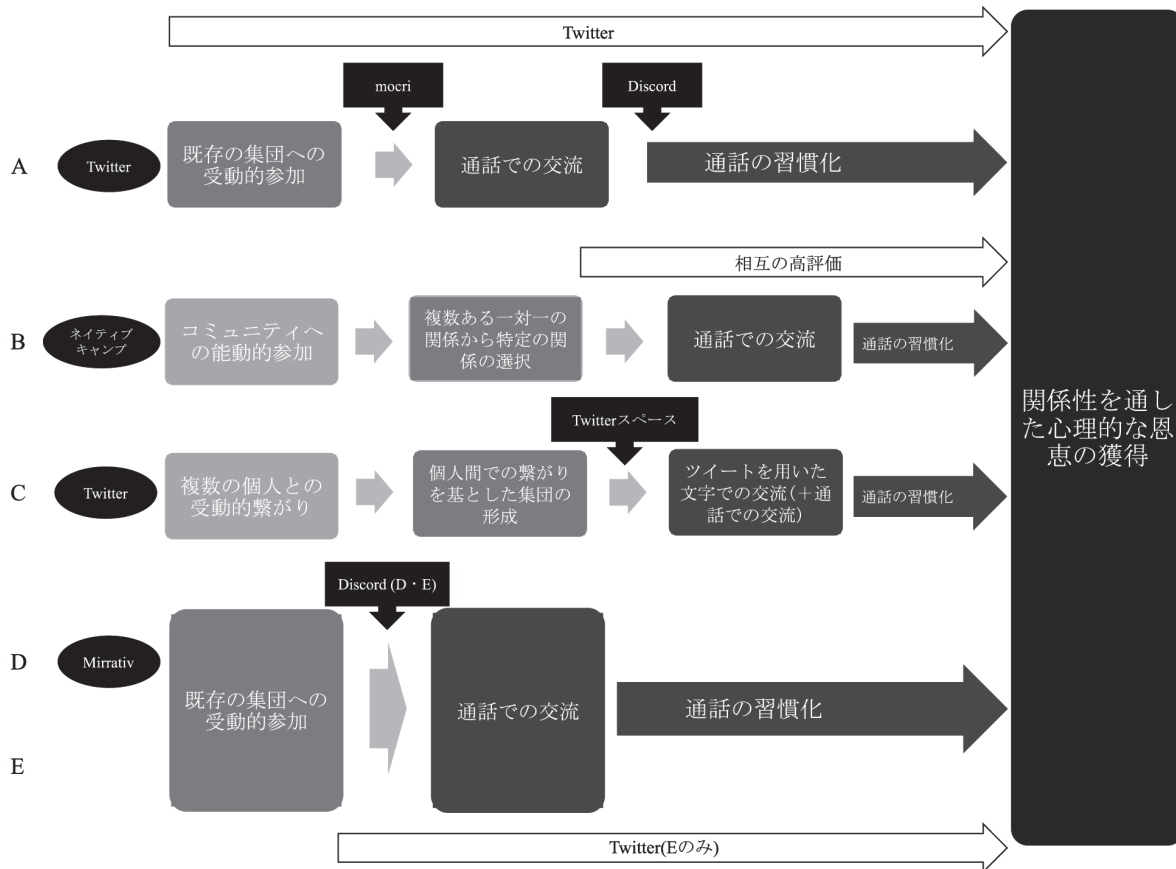


図1. 各参加者におけるインターネット上での居場所となる人間関係の構築過程

誘を受け、あるグループへの参加に至った」といった点がこれに当たる。この段階では、自ら集団に参加したり集団を形成したりするのではなく、他者からの勧誘を受けて参加するという受動的な態度が見られるのが特徴である。

第二段階として、通話での交流がある。全ての参加者において、個人や集団との通話での交流が存在した。さらに参加者 A・B・D・E については、居場所を獲得していく中で、通話での交流が頻繁に行われていることが明らかになった。参加者 A における「通話の習慣化」、参加者 B における「通話機能を用いた対面に近い形での授業」「授業の習慣化」、参加者 D における「深夜や早朝までに及ぶ通話の習慣化」、参加者 E における「習慣化により深夜までの参加に変化を遂げた」といった点がこれに当たる。

第三段階として、関係性を通した心理的な恩恵の獲得がある。この段階では個人や集団と様々な交流を通して、心理的なメリットを得る段階である。例えば参加者 A においては「相手からの対人信頼感」「集団所属感の高まり」「互いの自己肯定感の高まり」、参加者 B においては「他者肯定感の獲得」、参加者 C においては「集団所属感の獲得が可能である」という点、参加者 D においては「通話グループへの参加による集団所属感」、そして参加者 E においては「日常生活と変わらぬ『ツッコミ』の役割を得る」という点が、それに当てはまる。また多くの参加者において「集団所属感」の獲得や「集団所属感」の高まりが見られた。

そしてこれらの段階を踏まえ、インターネット上の人間関係における社会的居場所が獲得される。

## V. 考察

### V. 1 考察とまとめ

本研究では、インターネット上での居場所となる人間関係がどのように構築されていくのか、その全体像についてインタビュー調査を行った。その結果、本研究では3つの段階から構成された構築過程が見出された。

第一段階は、既存の集団への受動的参加である。この段階では、以前から存在していた集団に他者からの勧誘を受けるなどして、受動的に参加するといった特徴が見られた。このような行動が多く見られた理由として、インターネットに対する警戒心が強かったことが挙げられる。例えば参加者 A については「その習慣化で解消された対人不安」と示されており、関係初期には不安を感じていたことがうかがえるだろう。参加者 D についても、「匿名性や外見情報の秘匿といったインターネット上での交流に対する印象や周囲に対する非現実感」があったことが明らかになっている。また参加者 E においても「緊張感は、実名や顔がわからない相手との交流であるという認識から発生していた」という点から、インターネットを警戒する姿勢があったことが推測される。しかし既にその集団に所属している且つ、ある程度の信頼関係のある知人からの勧誘があったことで、安心感を得ることができ、集団への参加に繋がったと考えられる。

しかしこの段階では、一部の参加者において違いが見られた。例えば参加者 B については、オンライン英会話というコミュニティに参加しているものの、発生したのは講師との一対一の関係性のみであった。さらに「アプリという手軽な形での英語学習を発見」とい



う点から、他者に勧誘されたのではなく、関係性のきっかけとなった英語学習を自ら開始したことも示されている。これらのことから参加者 B における第一段階では、コミュニティへの能動的参加、複数ある一対一の関係から特定の関係の選択という 2 つの段階があったと考えられる。そして参加者 C についても、「C を中心とした様々な人間関係から、インターネット上のグループが発生した」という点から、元から集団があったわけではないことが示されている。さらに「返信を受けて始まる、受動的な繋がりが発生した」という点から、個人との繋がりは受動的なものであったことも明らかになっている。これらのことから参加者 C においては、複数の個人との受動的つながり、個人間での繋がりを基とした集団の形成という 2 つの段階が踏まれたと考えられる。このように、参加者によって個人や集団への関わり方には違いがあり、個人や集団にどのように関わり始めたのか、相手や集団にとって自分はどのような立ち位置であるかによって、居場所を獲得するまでの過程にも違いが現れると言えるだろう。

第二段階は、通話での交流である。この段階では、多くの参加者において居場所を獲得していく中で、通話での交流があったことが示された。また通話への参加頻度や通話時間の増加も、ほとんどの参加者において見られた特徴であった。そしてこれらの結果はインターネット上の人間関係において、声が比較的容易に開示できる情報であったことを示しているのではないかと考えられる。参加者 A における「外見情報の相互開示」、参加者 D における「外見情報の開示の重要性」とあるように、インターネット上において自身の外見を発信することが、危険性が高く容易に行ってはいけないと認識されることは少なくない。しかしこのような顔といった外見情報を見せない状態であることは、対面のような非言語コミュニケーションが行えないことも同時に示している。そして非言語コミュニケーションが十分に行えないということは、相手の心情などを推察することを困難にすると考えられ、関係が進んでいくことを妨げる可能性があるだろう。そのような状況にあるインターネット上において、声を聞くことができる通話は重要な役割を果たしていると推測される。また初対面の他者のパーソナリティについての印象を形成する場合、声の質や話し方などの聴覚的な手がかりがかなり優位に働いていること（廣兼・吉田、1984）からも、通話はインターネット上の人間関係において、相手の印象を形成する際の重要な手がかりになっていると考えられるだろう。

その一方で参加者 C においては、この段階でも少し違いが見られた。ストーリー・ラインにおいて「自由度の高い通話機能による声での気軽な交流」とあったように、通話での交流はある程度見られた。しかし「エアリプライを用いた周囲に見える形での会話」「偶発的なタイムライン上でのグループの会話」といった交流が多く見られることから、通話よりもエアリプライを用いた文字での交流が頻繁であったといえるだろう。このことから、文字での頻繁な交流が通話での交流の代替となっていたことが推測され、参加者 C における第二段階では、ツイートを用いた文字での交流という段階があったと考えられる。

第三段階は、関係性を通じた心理的な恩恵の獲得である。この段階では特に「集団所属感」の獲得や「集団所属感」の高まりといった特徴が多く見られた。そしてこのような獲得された心理的な恩恵は、原田・滝脇（2014）が指摘した居場所であると実感できる概念に共通する部分があると考えられる。例えば「集団所属感」という概念については、自分が受け入れられていると感じる被受容感、孤立することなく周囲に溶け込んでいると

感じる帰属意識といった概念が含まれていると推測される。また参加者 E において見られた「役割を得る」という点については、認められる、必要とされるといった自己有用感、自分には役割があると感じる役割感（原田・滝脇、2014）といった概念が含まれていると推測される。このように個人や集団との関係性において得られた心理的な恩恵は、居場所の実感に繋がる概念を含んでおり、居場所の獲得に強く影響していたと考えられるだろう。

そしてこのような段階を踏んで居場所を獲得していく中で、通話の習慣化が1つの分岐点となっていることが明らかになった。では何故、通話の習慣化は進んだのだろうか。まずは環境要因として、新型コロナウイルス流行期であったことが挙げられる。本研究で取り上げた5件のインタビューのうち、4件は新型コロナウイルス流行以降に始まった関係性であることが明らかになった。そしてそのうちの3件は、新型コロナウイルス流行により発生した自由時間を活用する中で始まったものであることも示されている。このように日常生活の大きな変化により突如発生した時間的余裕が、関係性のきっかけになったと同時に、関係を深めるうえで重要であった通話を継続させたと推測できるだろう。また参加者 D において見られた「深夜や早朝までに及ぶ通話の習慣化」や、参加者 E における「習慣化により深夜までの参加に変化を遂げた」といった点から、自由時間は通話の習慣化だけではなく、通話が長時間続くことにも繋がったと考えられる。

そして内的要因として、習慣化に関する主体的行動における4つの心理状態（堀川他、2022）を通話の中で感じており、それらが通話の習慣化に寄与していたと推測できることが挙げられる。ここでの4つの心理状態とは「高揚感」「平穏感」「好奇心」「向上心」を指し、本研究ではこのうち「高揚感」「平穏感」を感じていたことが示唆された。まず「高揚感」では、例えば参加者 A の「関係形成のきっかけとなったゲームの存在があり、同じ時期に同じものを楽しむという共通点」から、周囲と同時期に同じゲームを楽しんでいたことによる「高揚感」を感じていたと推測されるだろう。また参加者 D においては「周囲の共通の趣味であるゲームの開始」があったことから、ゲームを一緒に楽しめるようになったことで「高揚感」を得ることができたと考えられる。そして参加者 E については、「共通している好きなアイドルコンテンツについての語り」「関わりの中での楽しさを感じていた」といった点から、好きなコンテンツを通じた周囲との関わりを楽しさを感じており、「高揚感」を得ていたと推測されるだろう。

そして「平穏感」についても、例えば参加者 B には「友人や家族といったパーソナルスペースに踏み込んだ話題へと変化」があったことから、より親密な話題を選択してもいいと思えるほどの「平穏感」を得ることができていたと推測される。また参加者 D については「グループ通話の目的の変化」があり、これは通話の主要な目的であったゲームを一緒にプレイすることが、周囲との対話に変化したことを指していた。このような変化が起こったのは、通話を通して集団に対する「平穏感」を得たことで、周囲とより話してみたいという思いが発生したからであると考えられる。最後に、参加者 E においては「通話参加に対する文字から声への変化が起こった」という点から、返答までに思考する猶予のある文字の対話ではなく、即時的な反応に依存する声での対話でも問題がないと思えるほどの「平穏感」を感じていたと推測されるだろう。

しかし堀川他（2022）が示した4つの心理状態は、そもそも個人が主体的に行動できる体験でのみ見られるものであり、自分以外の他者が必要となる通話においては、見ること

のできなかった心理状態もあったと考えられる。

では、本研究の結果は青年期における居場所を考えていくうえで、どのように貢献することができるだろうか。まず、これまでは十分に検討されてこなかったインターネット上での居場所の具体的な様相が、明らかになったといえるだろう。これまでの研究では、インターネット上での人間関係や、それにより発生する居場所について焦点が当てられたとしても、それらがどのような特徴を持ったものであるかは明らかになっていなかった。本研究では、インターネット上での居場所となる人間関係の構築過程を検討できたと同時に、具体的な現状を理解することもできたと考えられる。そして現状を把握できたことは、青年にとってより良いインターネット上での居場所はどのようなものであるか、改めて検討する際の新たな指針になると推測されるだろう。またインターネット上で居場所となる人間関係を作っていく上で、通話機能が大きく貢献していることも明らかになった。このことから、インターネット上で居場所を作ることを促進していくうえで、通話機能を設置することは重要であるといえる。新型コロナウイルス流行の影響がまだ根強く残る現状も踏まえると、通話機能はより効果を発揮すると考えられるだろう。

## V. 2 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題を述べる。1つは、データ収集の不十分さが挙げられる。本研究の参加者は5名となっており、データ収集が十分とは言えなかった。そしてデータ数の少なさから、一部の参加者に見られた段階における細かな違いやその他の構築過程の可能性を十分に検討できなかった。今後それらを検討することによって、インターネット上での居場所となる人間関係をより広く捉えることができるだろう。さらに本研究で検討された構築過程と比較することで、それらの過程を互いに見直すことも可能となり、新たに検討すべき点も明らかになると推測される。

また、個人的居場所について検討しきれなかったことも挙げられる。本研究では人間関係を前提としていたため、社会的居場所に焦点が当てられた。しかし居場所をより深く捉えるうえで、個人で成り立つものである個人的居場所について検討し、社会的居場所の在り方と比較することは必要であると考えられるだろう。今後それを検討することによって、藤野(2017)が指摘していたような、インターネット上の個人的居場所に近い側面についてもより深く理解することができると予測される。

### [参考文献]

石本雄真、「こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用感との関連から—」、『カウンセリング研究』、43、2010a年、72-78頁

石本雄真、「青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響」、『発達心理学研究』、21(3)、2010b年、278-286頁

大谷尚、『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』、名古屋大学出版会、2019年

岡本卓也、「SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス」、『信州大学人文科学論集』、4、2017年、113-131頁

柏原勤、「Twitter の利用動機と利用頻度の関連性：『利用と満足』研究アプローチからの検討」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』、72、2011 年、89-107 頁

杉本希映・庄司一子、「大学生の『居場所環境』と精神的健康との関連—過去の『居場所環境』の認知との比較を中心に—」、『共生教育学研究』、1、2006 年、37-47 頁

総務省、「令和 3 年通信利用動向調査」、2022 年

高谷邦彦、「サード・プレイスとしての— Twitter 子育て主婦ユーザの場合—」、『名古屋短期大学研究紀要』、57、2019 年、1-13 頁

内閣府、「子供・若者の意識に関する調査」、2020 年

中島喜代子・廣出円・小長井明美、「『居場所』概念の検討」、『三重大学教育学研究紀要』、58、2007 年、77-97 頁

原田克巳・滝脇裕哉、「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」、『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』、6、2014 年、119-134 頁

廣兼孝信・吉田寿夫、「印象形成における手がかりの優位性に関する研究」、『実験社会心理学研究』、23(2)、1984 年、117-124 頁

広田すみれ・大谷華・大久保智生・白川真裕、「大学生のオンラインの居場所を考える—リアルな居場所の知見から—」、『環境心理学研究』、10(1)、2022 年、1-9 頁

藤桂・吉田富二雄、「インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響：ウェブログ・オンラインゲームの検討より」、『社会心理学研究』、25(2)、2009 年、121-132 頁

藤野千種、「SNS を介したインターネット上での心理的居場所と well-being の関連」、『神戸大学発達・臨床心理学研究』、16、2017 年、14-18 頁

堀川将幸・藤村諒・佐藤浩一郎・寺内文雄、「習慣化に関する主体的行動に着目した経験価値変化モデルの提案」、『デザイン学研究』、68(4)、2022 年、45-54 頁

宮下敏恵・石川もよ子、「小学校・中学校における心の居場所に関する研究」、『上越教育大学研究紀要』、24、2005 年、783-801 頁

文部科学省、「『絆づくり』と『居場所づくり』」、2015 年

文部科学省、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」、2021 年



# How and why Japanese college students develop “Ibasha” in Internet communities: An interview study

Fujii Misato, Dou Xue

## Abstract:

Having “Ibasha” or a sense of interpersonal rootedness, has been found to be important for the development of children and adolescent. While Ibasha are traditionally constructed within family, schools and local communities, the Internet also started to be recognized as an alternative space for developing Ibasha. However, the process and factors that lead to the creation of Ibasha on the Internet has not been fully investigated. Therefore, this study examined how relationships that serve as a function of Ibasha on the Internet are constructed among adolescents. Particularly, the study interviewed five college students who had previously established new relationships on the Internet and who had felt Ibasha in those relationships. The results indicated that the relationships with Ibasha on the Internet were constructed through three stages: passive participation in an existing group, interaction using calling functions, and the acquisition of psychological benefits in the relationship. However, not all participants underwent this process, indicating a need for further examination in the future.

Keywords: Ibasha, Internet, the process of Ibasha creation